

漢法苞徳塾資料	No. 131
区分	辨証
タイトル	証までの手順
著者	八木素萌
作成日	1996.06.02

1. 三因の弁別

内・外・不内外

2. 五行の弁別

- ・臓腑の五行……肝胆・心小腸・脾胃・肺大腸・腎膀胱
- ・病因の五行……風・暑熱・勞食湿・燥・寒
怒・喜・笑・思・慮・悲・憂・恐・驚～～七情
- ・反応変動している経脈の五行
- ・五季と五臓と病因の五行的な関係
- ・実邪・正邪・虚邪・微邪・賊邪

3. 五行弁別を病臓腑と病因とに区分する

- ・尺膚診による病態の五行的認識
- ・舌診による、気血判定・津液状況の把握・病臓腑の判断
- ・候背診（蒙色診・触圧診・景色診察）と、募穴診とによる病臓腑の判断
- ・陽経の五行的な自穴による、また、『素問』金匱真言論第4の五邪舎客部位による、病因の五行的な区分を行なう。
- ・その臓の陰経脈の五行的性質に従って、それぞれの五行的な自穴と兪穴と、臍傍穴を連関させて、病臓を判定する。
- ・問診による所見と、他の四診から得られた所見を、症候の自覚的なもの他覚的なものを総合して、病態・病臓腑・病因・病理的産生物・反応経・反応穴などから、多角的・立体的に「病をイメージング」する。

4. 病態の寒熱の弁別

温・熱・暑湿・涼湿・爽・爽寒・霜爽・寒・寒冽・寒湿・労倦・怠寒・飢冷・軟弱・強張・鬱熱・
 自汗・無汗・盗汗・飲多・飲少・冷飲・熱飲・多尿・乏尿・頻尿・淋溺・遺尿・閉尿・食欲（変わ
 らぬ・増え気味・増えた・減り気味・減った・無い）・渴・厥・厥逆

主な触診部位

・大椎から大杼・肺俞・厥陰俞あたりまでの部位
 ・眇部 少腹部 膈俞より胆俞のあたり 大腹部
 季肋部 腋窩・腋下部 胸脇部 項頸部 四肢
 風の診所 火の診所 痰の診所 瘀の診所 飲の診所

5. 病理的産生物の弁別

風の診所 火の診所 痰の診所 瘀の診所 飲の診所

痰 これら病理的産生物の滞留する所は？
 飲
 瘀
 火

6. 三陰三陽の弁別

太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰
 並病 合病 伝経病 直中
 手足 左右

7. 反応変動している経脈の把握と五行の認識

太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰～～手 左・右
 太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰～～足 左・右
 奇経八脈……督脈・任脈・陰維脈・陽維脈・陰蹻脈・陽蹻脈・帶脈・衝脈 左・右
 経筋……太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰
 絡脈

8. 罹患時の運氣概略

季節の五行	春	木	立春・雨水・啓蟄・春分・清明・穀雨
	夏	火	立夏・小満・芒種・夏至・小暑・{大暑
	長夏	土	夏土用～～白露（他説では秋分の前日）まで
	秋	金	立秋・処暑・白露}・秋分・寒露・霜降
	冬	水	立冬・小雪・大雪・冬至・小寒・大寒
気候	ウツウシイ. カラリトシテル. アツクルシイ. ムシムシスル・ツメタイ・サムイ		
	晴れ（日本晴れ・晴天 割程度の晴れ・時雨あり・雨や雪になって行く） 曇り（薄曇り・厚い曇り・どんより重い・雨や雪になって行く） 雨（日和雨・霧雨・豪雨・暴風雨）. 風（無風・微風・そよ風・強風・暴風・暴風雨）. 温. 暑. 湿. 爽. 燥. 涼爽. 寒い・冷たい・冰冷. 涼湿. ☆気温（ 度） ☆風速（ m） ☆降雨量（ ミリ） ☆湿度（ %） ☆降雪量（ m）		
1月・2月・3月・4月・5月・6月・7月・8月・9月・10月・11月・12月			
陽……甲1・丙3・戊5・庚7・壬9		陰……乙2・丁4・己6・辛8・癸10	
陽……子1・寅3・辰5・午7・申9・戌11 (時刻・月)		陰……丑2・卯4・巳6・未8・酉10・亥12	
子午循環の旺壮と対経関係		〈円図〉	
歳運の大過不及		〈表〉	
生れの九星（九曜）			
一白水星・二黒土星・三碧木星・四緑木星・五黄土星・六白金星・七赤金星・八白土星・九紫火星			

9. 居住・家族・生活などの状況

居住	環境	都会・郊外・田園地帯・漁村・谷戸区域・山林・海岸・湖岸 良く乾燥している・湿気がある・湿気が高い
	建築条件	平地・低地・丘上・高地・東斜面・東南斜面・南斜面・南西斜面・西斜面・西北斜面・北斜面 平屋・1階・2階・3階・高層階（ 階）
	居室	（ 階）－広さ＝ 畳） 建物の中の位置（東・東南・南・南西・西北・北・北東）
	採光	（日当たり）良い・悪い・無い・少し
	窓	広・狭・無・普通 東向・東南向・南向・南西向・西向・北西向・北向・北東向
	風通し	良い・少し・無い

家族関係	
生活状況	社会的側面 経済的側面 社会的交際側面 行動範囲や運動量

10. 病のイメージングの問題

三因が判かり、病因の五行が判かり、問題の病理的産生物とその所在が判かり、病態の基本が認識され、病臓腑と病位が判かり、病の程度が明らかになり、反応経脈が判かっているならば、正しく「治療を組み立てる」ことができる。これを、なるべく手短か簡明に表現しようとする、つまり、『病のイメージング』である。

その為の主要な点は、以下の通りである。

1. 素因的・ライフスタイル的な病の背景と「14難」に記述されている意味での五臓論的な問題点 [本質論的な土俵・土台] の認識
2. 病因の把握、とくに三因の弁別・病因の五行の弁別
3. 病態の意味と、病理的産生物の種類と、臓腑経絡論的な所在
4. 病んでいる臓腑と変動している経脈
5. 予後論の為に、実邪・正邪・虚邪・微邪・賊邪などの五邪判断と、並病・合病・伝経病・直中などの伝病判断、運氣論的な予後論の判断、病の程度〈体成分－衛気榮血、五体論－皮毛腠理・血脈・肌肉・筋・骨、臓腑経絡体制論的－皮部・孫絡・絡・大絡・経・腑・臓～正経・奇経・経筋なども〉
6. 病位……臓腑的・経絡的・体成分的・三陰三陽論的・その他など